

イエス・キリストに従う、 永遠の命への道

マルコによる福音書10章17～31節
2023年2月19日
松田 基子 師

私達は何故、イエス・キリストを信じるのでしょうか。勿論イエス・キリストこそ、神の御子、真の救い主、私の存在を永遠に保証して下さるお方だと信じているからです。それは、永遠の命を得たいためではないでしょうか。人は死の彼方で、永遠の命と、永遠の滅びに二分されることを知れば、誰も永遠の命を得たいと願うのは当然のことです。

しかし、願う事と与えられる事とは違います。私達は自己中心で欲張りですから、永遠の命だけに賭けることが出来ないで、あれも欲しい、これも欲しいと願う者です。どうしたら良いのでしょうか。今朝の聖書箇所、その様な人のことが記されています。マルコ10章17節に、

「イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。

『善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいのでしょうか。』

とあります。この時イエス様は何処へ旅立とうとされていたのでしょうか。イエス様はエルサレムに向かって、人類の罪の贖いのための十字架を覚悟して旅立とうとしておられました。

そこへ、一人の神様を崇める、真面目な男性が、真剣な問いを抱えて、イエス様の許へやってきました。彼はイエス様の姿を見つけると、走り寄って跪きました。それは心から自分が抱えている問題の答えを求める姿でした。彼の質問はこうです。17節に、

「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいのでしょうか。」

この人は、ダニエル書12章2節に記されている、「多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠の生命に入り、ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる」

の言葉から、死後にその行く先が二分される事を、小さい時から教えられて来ました。大人は良く、子供が何か悪いことをすると、「そんな事をしたら地獄に行くよ」と脅します。

イスラエルでは、小さい時から律法を教えられ、訓練されてきましたから、

『律法を守らなかつたら、永遠の命を受けて、天国へは入れない』

と教えられて来たのです。いま、彼は永遠の命を受ける確信が無く、不安でした。そこに、イエス様は、マルコ1章15節で、

「時は満ち、神の国は近づいた。

悔い改めて福音を信じなさい」

と言って、神の国を説いておられました。永遠の命を得ることと、神の国に入る事は、同じ意味です。彼は、

『イエス様なら明快な答えを下さるに違いない』

と感じました。ですから、一般的な呼び方で、『先生』

と呼び掛けるのではなくて、10章17節で、

「善い先生」

と、呼び掛けたのです。イエス様はその呼び掛けに対して、18節で、

「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。

神おひとりのほかに、善い者はだれもいない」

と、お答えになりました。私達人間にとって、イエス様に優る善き師は居ません。それなのにイエス様は何故、その事を拒否されたのでしょうか。イエス様は、ここで、決して人間のラビ(教師)と比べられている事を不満に思われたものではありません。

彼が善き師を

『人間のレベルに置いているために、

彼自身の、本当の姿が見えないでいる』

事に気づかれたのです。人は神様の前に立たなければ、自分の本当の姿は分かりませんし、また、認めることが出来ません。

『この人にとって、イエス様が人間の師、善き先生である限り、人生の根本的解決を得る事は出来ない』

のです。そこでイエス様は、彼が神様の前に出るように、18節で、

「神おひとりのほかに、

善い者はだれもない」

と、お答えになりました。神様の前に立つ。

それが原点です。そして、彼の、

「何をすればよいでしょうか」

との問いに、神様が人間に命じられた、十戒の隣人に対する、根本的な責任を示されました。

19節から、

『殺すな、姦淫するな、盗むな、

偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』

と言う掟をあなたは知っているはずだ」

と言われました。イスラエル人にとって十戒は生まれた時から、体と心に染みついています。

そこで彼は、

「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」

と答えました。彼はまだ、神様の前に立っていません。彼は小さい時から律法監視社会の中で、周りから、律法を守る良い子として育てられました。心の中では、

『いやだ。やりたくない』

と思っても、良い子でいたいために、表面上は繕って来ました。周りからは、

「良い子だ。良い子だ」

と、誉められて、自分に及第点を与えていたのです。大人になってからも、そんな生き方から解放される事はありませんでした。周りの人々から、

『立派だ』

と、言われなくては、安心出来ず、心に平安は無く、何をすれば、永遠の命を得て、神の国に住むことが出来るのだろうか、その事が、彼を悩ませていたのです。

人間は神様に命を与えられ、生かされている者です。神様との関係が、しっかり正しく結ば

れない限り、人生の全ての問題は解決しません。人は誰も、隣や周りと比べて、自分に及第点を与えていますが、永遠の命の与え主は神様です。人は神様の前に立って初めて、自分の真の姿が分かり、自分の醜さ、罪に気付くのです。

この男性は、その一番大切なことに気付いていませんでした。しかし、イエス様は彼の存在を愛し、彼の心の目が開かれることを願って、21節を見ますと、

「イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。

『あなたに欠けているものが一つある。

行って持っている物を売り払い、貧し人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を積むことになる。それから、私に従いなさい』

と招かれました。イエス様は彼に、永遠の命の与え主は、神様以外になく、

『神様はご自身への、絶対的信頼を求めておられる』

事を教えるために、彼が今、一番依存している物を示されました。

それは、彼にとって、

『この世の富でした。』

イエス様は、マルコ8章34節で、

「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか」

と、教えられました。

ここで言われている、

『それが、永遠の命です。』

彼は永遠の命を得る為に、地上の命を失わなければならないのです。つまり、地上の命は神様からの預かり物で、自分の物ではないのですから、お返ししなければならないのです。全ては神様の物、富も知恵も力も、全ては神様の物で

す。神様の物である証明に、神様の物は一度お返しして、

『神様から【お預かりしている】その事を自覚しなければなりません。』

イエス様は彼にその原点に立ち帰らせ、本気で神様に従う事を求められたのです。

彼はこれまで神様に従っているつもりでしたが、実はこの世に執着し、この世に従っていたのです。イエス様は、彼がこの事に気付くために、彼が一番依存している富を神様に返して、神様に従う事を求められました。彼はイエス様のこの招きに、22節を見ますと、

「その人はこの言葉に気を落とし、
悲しみながら立ち去った。たくさんの
財産を持っていたからである」

と記されています。彼はイエス様に出会って、今まで自分でも気付かなかった、自分が頭わになりました。しかし、せつかくイエス様の許に来ながら、永遠の命の与え主を拒否して、この世の富に戻って行ってしまいました。

イエス様は23節で、弟子たちを見回して言われました。

「財産のある者が神の国に入るの
なんと難しいことか」と。

財産、富、それ自体は、善でも悪でもありません。しかし、人間の心は富に依存する性質を持っています。富は自分の欲しい物の多くを手にすることが出来ますから、その人に万能感を与えます。そうすると、もう神様に頼る 必要が無くなるのです。イエス様は、

マタイ 6章24節で、

「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」

と言われました。

人間は、富に支配され、富の奴隷になりやすいのです。この時、イエス様の周りには、その

日の食べ物にも事欠く人たちが大勢いました。イエス様はそう言う人たちの苦しみを肌で感じておられました。一方、有り余る富を持ちながら、自分の欲望を満たす事には、惜しげもなく使い、食べるものがない人の苦しみに、何の痛みも感じないと言うのは心を失った富の奴隷です。

イエス様はそこで、25節を見ますと、

「金持ちが神の国に入るよりも、
らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」

と言われました。誇張した表現ですが、らくだが針の穴を通ることは不可能です。

『金持ちが神の国に入るのは
それ以上に不可能だ』

と言う事になります。

イエス様のこの言葉に、弟子たちは、ますます驚いて、

「それでは、だれが救われるのだろうか」と互いに言い合ったのです。弟子たちは、イエス様が、神様への絶対的信頼こそ求めるべきものであることを、教えようとしておられるのに、その事がまだ分かりません。弟子たちは思いました。

『立ち去った金持ちは、律法を守っている人なので、施しも怠ることなく、沢山行ったことでしょう。それなのに、全てを売って施こさなければ、神の国に入れないとは、それは余りにも厳し過ぎる。では、いったい誰が救われるのだろうか。誰も救われないのではないか』

と、考えました。

弟子たちもまだ、

『何かを行う事で、神の国に入れるのだ』と考えていました。人間は行いによっては決して神の国に入ることは出来ません。

イエス様はその事を、27節で、

「人間にはできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ」

と、ご自身の十字架の贖いを見据えて、お答えになりました。ところで、ペトロはイエス様の真意が分からないまま、イエス様の求めに応える事

が出来なくて、立ち去った金持ちと、自分を比較しました。彼と違って自分は、持ち舟も、仕事も捨てて、イエス様に従って来たのです。

『その事をイエス様はどう思っておられるのだろうか。』

ペトロはイエス様に尋ねました。28節で、

「このとおり、わたしたちは何もかにも捨ててあなたに従って参りました。」

すると、イエス様は、

「はっきり言うておく。わたしのためまた福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てた者はだれでも、今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子供、畑も百倍受け、後の世では永遠の命を受ける」

とお答えになりました。イエス様は、ご自身に全信頼し、従って来た者に対して、神の子、救い主の命を賭けて、ご自身を信じ従う者の全存在を保証して下さいます。

確かに、イエス・キリストを信じ、従った為に、親に勘当され、兄弟姉妹からも疎まれ、財産も奪われると言うことは教会史に続きました。この世は神様に敵対する世界であり、神の御子を十字架に架けて抹殺するのです。そのイエス・キリストに従う事は、当然迫害を受ける事になります。弟子たちは迫害を受けたなら、何もかも奪い去られ、無一物になると思っていました。

ところがイエス様は、30節で、

「今、この世で迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子供、畑も、百倍受け、後の世では永遠の命を受ける」

と言われたのです。イエス様に従う事こそ、永遠の命への道なのです。この世に於いても、来るべき世に於いても、真の命の保証者、存在の保証者は、神様です。罪ある人間は、全財産を献げても、それは元々神様のものです。命、それも元々神様のものです。それらを献げても、自分の罪を償う事は出来ません。人は罪無き神の御子イエス・キリストの贖い無しには、救われ、永遠の命を戴いて、神の国に入ることは出来ないのです。ご自身を十字架に架けて

まで、信じる者に、永遠の命を与えて下さるイエス様が、地上に於いてもその全ての責任を負って下さらない筈がありません。

主と共に歩んで下さる地上の旅路は、失った物の百倍を満たして余りあるものです。失う事は良いことです。一度神様にお返しすると、神様は清めて、また、委ねて下さいます。その事が分かれば、私たちは貪欲になる事はありません。私たちには善き管理者となり、御旨のままに、与った全てを管理する事が求められています。一日、いちにち祈りつつ、御旨を求めつつ歩めば良いのです。私達の目的は、直すらイエス・キリストに信頼し、従い、転びながらも、神の国を目指して歩み抜いて行くことです。イエス様に全信頼し、従う、それが永遠の命への道です。

お祈りをいたします。

憐れみ深い天の父なる神様

私達に与えられている命も人生も、全ては神様のものです。愚かにも、自分の物だと握り締め、それに依り頼もうとする罪をお赦し下さい。

私の全存在を保証して下さいるのは、イエス様以外にありません。イエス様の十字架の贖いに感謝し、イエス様に全信頼して、直すら主に従い、御国を目指して歩み抜いて行く者とならせて下さい。弱く転びそうになる私たちをお助け下さい。

尊い救い主、イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。